わが街わが故郷

九谷焼の里（CRADLE OF KUTANI）寺井町

㈱東振精機と石川県能美郡寺井町

No. 17

1．株式会社東振精機と寺井町

石川県の南部、米どころの加賀平野中央部に位置する人口16千人、総面積13㎢、そのうち4割強が水田という緑豊かな寺井町に、ベアリング組込用ころの専門メーカーである株式会社東振精機は立地しています。

南西上空から見た寺井町

寺井町が近郷の町村合併により誕生したのが1956年（昭和31年）、それから半世紀を経て、2005年（平成17年）2月には、NYヤンキースの松井秀喜選手や森喜朗元首相の出身地である根上町（ねあがりまち）と、全国に2つしかない国立先端技術大学院大学のうちの一つ北陸先端技術大学院大学（JAIST）がある辰口町（たつのくちまち）と合併して「能美市」（のみし）となる予定です。偶然にも、当社会長中村房信が石川県金沢市で当社を設立したのも56年ですので、当社と寺井町は同い年ということになり、来年には50歳を迎えます。

56年に「日本の産業振興に役立ちたい」という願いから「東（日本国を表す）振（振興の振）」と名づけられた町工場が金沢市郊外に設立され、最初に手がけたのが円筒ころの生産でしたが、大手ベアリングメーカーに購入していただけるまでには2年の歳月が必要でした。あるベアリングメーカー様に精密級の円筒ころとして採用していただき、増産体制に入りましたが、金沢の工場は周囲が水田であり、その当時はまだ工業用地として拡張することが難しかったため、62年に寺井町の工場誘致第1号として工場の全面移転を行いました（当時の売上高71百万円）。

当町へ移転した以降、62年に円すいころ、68年に球面ころ、74年に中空ローラ、82年に針状ころおよび精密ピン•シャフト類、と生産品種も拡がり、国内外のほとんどの大手ベアリングメーカー様に納入させていただけるようになりました。また、82年以降は技術面•コスト面を追求していった中で、生産設備の主力である心なし研削盤の自社開発を行い社内に展開し、88年以後は当町の隣の小松市にありますグループ会社で外販まで手がけています。この間当社の製品出荷額も年間50億円を超えるまでになり、寺井町全体の15%弱を担うまでにいたっております。

社　屋

今後も、「創る・考える」をモットーに「今日よりは明日、明日よりは明後日と、必ず創意工夫をする」を実践し、更なる精度の向上、生産性の向上を図り、この地から世界へ発信できる“ころづくり”・中小メーカーならではの“ものづくり”を続けてまいります。

参考：当社のことをもっと知りたい方には
http://www.tohshin-inc.co.jp（当社グループHPです）をご覧下さい。

2．寺井町のルーツを尋ねて

①歴史

日本三名山の一つ霊峰白山を源流とする、石川県最大の河川「手取川」の扇状地に立地する寺井町のルーツをたどれば、紀元前15,000年前ごろにまで溯ります。能美丘陵で石器を使った狩猟採集生活が行われ、その後紀元前2500年ころ(縄文時代)には定着化が始まり、当地でも和田山下に集落が出現します。この集落を中心に手取川の豊かな水を利用した稲作が紀元前100年ころから営まれ、200年ころには鉄器の普及により農耕がすすんで能美平野に集落が急増していき、竪穴式住居や高床式倉庫が造られるようになります。農耕が始まると力のある地方豪族が誕生し、その一族の死後には和田山や寺井山の尾根に方形周溝墓が造られるようになり、300年ころの古墳時代には方墳•前方後方墳•前方後円墳など70〜80基もの古墳が築かれました。

奈良時代は、現寺井町を含めた江沼郡は越前国（現在の福井県）七郡の一部で、この七郡から加賀郡と江沼郡を分割して加賀国ができたのは平安時代嵯峨天皇の823年で、全国68国中の最後に誕生した国です（この分割と同時に江沼郡から能美郡が分出して現在の郡名となっています)。武家の時代に入ると、歌舞伎の「勧進帳」で有名な、源義経が北陸道を通って京から陸奥へ逃走する途中の“安宅の関”で義経一同を見逃してやった守護である富樫氏一族が支配することになりました。

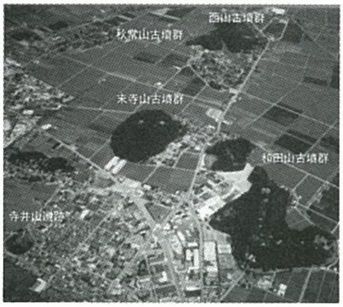
室町時代半ばになると、真宗本願寺派の蓮如が農村への教線を拡張し、やがて農村門徒による一向一揆が勃発し1488年には守護富樫家を滅亡させ、「百姓の持ちたる国」に変身していきます。戦国時代になると、この一向一揆衆と越前朝倉氏•尾張織田氏•越後上杉氏が手取川を境に幾度も戦い、最終的には尾張織田氏が制圧して、その家臣である前田家による江戸時代の百万石体制が敷かれたことは、ＮＨＫ大河ドラマ「利家とまつ」で紹介されたとおりです。

加賀藩は十村（とむら）と呼ばれる独自の支配制度を敷いて年貢の納入や農民の管理を行い、寺井町のもととなる寺井村もこの中で生まれたものです。寺井村は北陸街道の「手取川の渡し」の宿場として賑わったほか、江沼郡九谷村で生まれた九谷焼も、寺井村で盛んに創られるようになり、現在でも多数の窯元が営んでいます。

②よみがえる古代－能美古墳群－

能美古墳群は、手取川左岸の扇状地に、東西約２㎞、南北約1.2㎞の範囲に点在する５つの独立丘陵にある古墳群の総称です。現在まで弥生墓３基、前方後円墳２基、前方後方墳３基、方墳３基、円墳43基、あわせて54基が確認されており、未調査のまま消滅した古墳をあわせる

と70〜80基がこの狭い範囲に造られたものと推定されています。造営時期は弥生時代末期から古墳時代後半の約４世紀の長期に及び、方形周溝墓→方墳→前方後方墳→前方後円墳→円墳の順に継続して築かれていることがわかります。埋葬施設も木管直葬→粘土槨→粘土室→切石積み横穴式石室と変わってきています。中でも、全長約140mの秋常山１号古墳は北陸地方では突出した大型前方後円墳です。



西上空からみた能美古墳群

③九谷焼の里－五彩が語る350年の浪漫の世界－

創始期の「古九谷」は1665年（明暦元年）に現在の石川県山中町の山あい、草深い九谷の里で生まれました。加賀藩の文治政策のもと、支藩大聖寺藩の初代藩主前田利治が後藤才次郎を肥前有田に派遣して陶技の習得させた後、九谷の地で窯を築いたのが古九谷開窯とされています。絢爛たる加賀百万石文化を磁器に託した九谷焼は、やがて、冬の期間を深い雪に閉ざされる風土に逆らうように、絵付に紺青•紫•黄•緑•赤のいわゆる九谷五彩をふんだんに用いた豪華絢爛たる作風でした。しかし、素地が青みがかっているうえに砂混じりで粗雑だったために、それを覆い隠す方法として、花鳥山水や幾何学模様などで全面を塗りつぶす九谷焼独特の塗埋技法が生まれたといわれます。中でも黄と緑を多用した『青手』と呼ばれるものが多数焼かれました。しかし、この華やかな古九谷は1710年(宝永７年)に突然廃窯となりました。廃窯になった理由は今もって謎とされていますが、廃窯によってそれまで焼かれた九谷焼は後に『古九谷』と称され、再興された九谷焼とは一線を画しています。

古九谷が廃窯してから約100年を経た1807年（文化７年）に加賀藩営で金沢に春日山窯が開窯されました。ここからが再興九谷の時代に入り、春日山窯の木米風、大聖寺藩により古九谷窯の地で古九谷再興をめざした吉田屋窯、赤絵細描画の宮本窯、金襴手の永楽窯など数多くの窯が出現し、それぞれ特有のすばらしい画風を作り出してきました。中でも、世界的な規模で名を高めたのは、江戸末期に寺井村で生まれた九谷庄三（しょうざ）で、洋絵具による細密描法の「彩色金襴手」という技法を確立し、明治

九谷庄三作「色絵花鳥図大平鉢」

になると海外に輸出され、その派手さが外国人の好むところとなって『ジャパンクタニ』の名で人気を呼び、産業九谷としての地位を築きました。寺井町は、その中心地として多くの販売会社や作家など250近い事業所が現在でも集積しています。

参考：九谷焼の名品に触れてみませんか。
http://shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/kutani/index.html（石川新情報書府•九谷焼）
http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/syozou/

index_election.html（石川県立美術館所蔵品九谷焼名品選）

3．寺井町へのお誘い－Promenade To Terai－

2003年に能登空港が完成し、東京から小松空港→加賀→金沢→能登→能登空港、またはその逆ルートで、“石川県縦断の旅”ができるようになりました。ぜひ、その折に当地にもお立ち寄りいただければ幸いです。

①食の世界

日本海•加賀平野•白山連峰という豊かな自然の恵みにより近隣で採れる素材は豊富で新鮮です。特に冬は、“ずわい”や“紅箱”の蟹、甘エビ、寒ぶり、と、白山からの清流を活かした“菊姫”“天狗舞”“萬歳楽”など全国に名を知られた清酒との組み合わせは最高です。寺井町にも“弁慶”を醸造する蔵元があります。

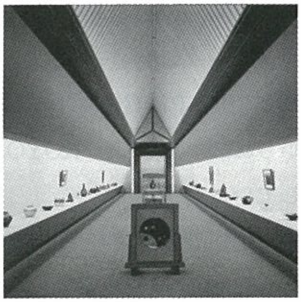
②癒しの世界

火山としての白山の恩恵は温泉です。これまでは、男性の団体向けのイメージが強かった加賀温泉郷も露天風呂付客室への改装など家族•グループ向けに変身中です。安く温泉を楽しみたい方には、各温泉にある共同風呂や各町が整備したクアハウスがお勧めです。寺井町には北陸初、当時では全国最大規模の“クアハウス九谷”（98年開業）があり、15種類の入浴や温水プール•ジムなどが楽しめます。

クアハウス九谷

③文化の世界

古代を巡る能美古墳群や九谷焼のすべてを満喫できる九谷陶芸村の散策はいかがでしょうか。陶芸村には九谷焼の歴史がわかる九谷資料館、陶器づくりや絵付けが体験できる九谷焼陶芸館、16の卸•小売店からなる九谷焼団地などの施設があります。中でもお勧めは文化勲章受賞•日



浅蔵五十吉美術館

本芸術院会員の二代浅蔵五十吉氏の作品を展示している浅蔵五十吉美術館です。同じく芸術院会員の池原義郎氏設計による建物と一体となった芸術作品として鑑賞なされば、きっと心が洗われる気分になれますよ。

（株式会社東振精機　中村 俊介）